旗野十一郎 編纂

日本詞學入門

下

375
25
2止

K10
2

本詞學入門卷之下

越後　旗野十一郎　編

元固有本然のもけを除くの外を多く語尾の轉化によりて七品詞の種類をあらはしたるの也故ふ其轉化の規則を知るを旨とを規則とを即八衢五種の法用を云ふ此八衢ふ五轉の變化四十二の受辞（ウケテニヲハ）結辞（カナ）の法ありて凡百の活動詞を都て此うちふ漏ることを〻然れども七品詞の種類を仍らず心得ざれバ轉化活用の法も悟ゑ得がたき故ふ前編ふ其大方を示し今又こゝふ轉化の規則を示し

24519
24.3.29

八衢五種活用圖

係辭	五轉活用	規則動詞 四段活	規則動詞 中二段活	規則動詞 下二
		館押打逢住釣	起落惣試老舊率	得受痩捨換
	第一轉 將然言	カサタハマラ ズデンヌジデズ バマシ	キチヒミリ ズデンヌジデズ バマレ	エケセテネ ズデズ ケテ
	第二轉 連用言	キシチヒミリ ツ、ケテ ナヌルバカ	ツ、ケテ ナヌルバカ	ツ、キ ナバ
ハモ徒 ヤゾノ何ナン	第三轉 截斷言	クツスフムルウ ランメリ トモ	ウルユムフツク ランメリ トモ	ウルユムフツク ランメリ ベキ
	第四轉 續體言	カナデマニヲヨリ	カナテマヤユヲヨリ	ウルユムフツクルハヲニマカナ
コソ	第五轉 既然言	ケテセヘメレ バドモ	バドモ	ウクスツヌレレレレレレ バド
	希求言	リリリリリリ ルルルルルル レレレレレレ	キチヒミリヨヨヨヨヨヨ	エケセテネヨヨヨヨヨ

動詞表

動詞表	不規則動詞 一段活	不規則動詞 變格			
段活	居射見于似着	來爲往去			
教譽消流植	居射見于似着	來爲往去			
第一轉	キニヒミレヰ ズデンヌジデズ バマシ	コセナナ ズデンスジデズ バマレ	バ。ム。ン。ズ。ス。ジ。	ベカ結合して接續法を作る。ンカ結合して未來を示す。ズカ結合して否不を示す。	
第二轉	チシキテケツ ツルケンケリ ヌルナバカ	ツ、ニシキテ ツルケンケリ ヌルナバカ	デ。ヌ。タ。ケリ。シ。	名詞とふるものデカ結合して接續を示ス。タリケリカ結合して過去を示す。他の詞と連合して集合名詞の體を作るものあり	
第三轉 一行	ギニヒミレヰ ルルルルルル ランメリ ベキ ラシ トモ	クスフムルウ ヌヌスク ランメリ ベキ ラシ トモ	ベキ。ベク。	現在の不定法かして動詞の本體あり名詞とふ体ものベキベクナリニコトト等カ結合もるものなり	
第三轉 二行	クフツムユルウ ルルルルルルル カナ マデ ヲニヲヤユヲヨリ	クルスフムルウ ヌルスルルルヌ カナ マデ ヲニヲヤユヲヨリ	ナリ。ニ。コト。ト。		
第四轉 命令法 接續法 一行	キニヒミレヰ レレレレレレ バ ドモ	クスフムルウ レレレレレレ バ ドモ	バ。ド。ドモ。	命令法ありバドドモカ結合して接續法を示ス。	
第四轉 命令法 接續法 二行	キヒミレヰ ヨヨヨヨヨヨ	コセテネ ヨヨヨヨ	ヨ		

きて活用規則を知らむふをまづ此圖ふよをて四段の活きゝ中二段下二段一段變格までの經緯活用文字を暗記を奚し其暗記の為かたを四段の活きあらバカ[キ]クケ[サ]シスセまたカサタハマラ[キ]シ[チ]ヒミリと經行緯列ともふ記得しをれより五轉と云ふものを心得べし五轉とを第一將然言第二連用言第三截斷言第四續體言第五既然言ハれをを將然言とをまさふ去からんとをるの詞ふして今のことゝあゝれ後のことをかけて云ふなを連用言とを活言（ハタラクコトバ）へはらなりはゝく詞ふり截斷言とを変化たゆる詞續體言とを體言ふ續く詞既然言とを既ふ去かるの詞ふて（四段の活きふを希求言とをるなり）今のふと奈をきて一二例をあけくを〻くゝ〻ちゞヨクバ（下ヨあげたるクシキ活用圖七緯の活きふて動詞接續法のバふ結合をるものふり下同）と云ふを將然言ふてよいらわはいかを知らぬゞ若レよからう奈らバといふふとなをヨケレバと云ふを既然言ふてよいふよをてといふこと奈り又雪フラバ（四段ラ行）と云ふを將然言ふてまだ雪の降らぬさきふ若レ雪かふらう奈らバと云ふことなり雪フレバ（四段ラ行）と云ふを既然言ふて雪ふ降をたふ

よ　てと云ふ内に希ふり又既然言の希求言（コヘネカヒモトムルコトバ）を兼ねるを四段の活きかて第四音そのまゝ
（希求言かて即）
下知ゝ　アケ飽　オセ押　ウテ打　アヘ逢　スメ住　ツ
山鈎のことしされどそれうち　オセヨ車　ナケ
ヤヨの心　鶯　あゞまれ　まれよをヨ（動詞命令法かて召呼感詞のヨ文字か結合）
もるもの　文字をそへたるもあ中二段下二段一段
の三種を第一音ヨ文字をそふれば皆令をる詞
とある　射ヨ　着ヨ　落ヨ　試ヨ　得ヨ
受ヨ等のだとし連用言を廣く活き續く詞ふゝて
オモヒ思（四段ハ行）　オキ起（中二段カ行）　チリ落（四段ラ行）　ミ（四段マ行）

との　オモヒアマリ　オキアカシ　チリハテヽ
ミワタセバ　また　サカレ　サカユ　サカユ
ル　トゲ　トグ　トグル　ゆど動き活く詞の
タチサカレ（四段タ行下二段ヤ行）　ヨリクル（四段ラ行変格カ行）と連ゝ行
く詞を云ふかゝ（即集合動詞（或截斷言）を組立動詞）
る〻詞續體言を體ふはゞく詞みて　妻コフル戀
鹿〻とをいをはれど　妻コフ鹿　とをいもれぬ
あり　コフル（中二段ハ行）を續體言ふて　コフ（中二段ハ行）
を截斷言ふはゞかゝをかく詞ふ皆定ゝあることふ
るふ詞學を知らぬ人をヨクバと將然言ふいふべ

きゝころをヨケレバと既然言ふいひヨケレバと既然言ふいふべきを卻てヨクバと將然言ふいひ妻コフル鹿と云ふ類きを妻コフ鹿といふ素どう誤ゑ常ふれはくゐることあれバ人たるものよくく心をゑえて詞學をまなぶべき素り

如斯五轉詞の意を解し得たらバ活用を學ぶべし活用とゑ圖の首ふ書せし文字をを〜ゑ下ふ撰ひ書したる文字ふンの字をを〜て四段の活きふら

バ　飽（アカン　アク　アケ）　押（オサン　オス　オセ）　一段の活きあふ

バ　射（イレン　イル　イレ）　着（キン　キル　キレ）　と活用させてア

カンこれゑ將然言ふアキこれゑ連用言ふとと活用の語理を考へゝるべし

この五種の活用文字をたゞ其一端を示せしものふて訓ゑ皆續體言を以て去はしたゑまづこの文字の活用を盡く暗記し得屋しかくゑれバ自ら語學の妙理ふていかゑる詞も悟り得べき素り

四段の活用字（四段の活きとゑカキクケサシスセと第一音より第四音までアカンアキアクアケオサンオシオスオセと活くを云ふこの詞限りふく多し）

引（カ行活用）　寫（サ行）　打（タ行）　依（ラ行）

立（タ行）　進（マ行）　住（マ行）　成（ラ行）

在（オハル）サ行 変格サ行
振（フル）ラ行
生（イカス）サ行
待（マツ）タ行
歌（ウタフ）ハ行
威（オドス）サ行
分（ワク）カ行
育（ソダツ）タ行
和（ナム）カ行
降（フル）ラ行

祝（イワフ）ハ行
滌（ソム）マ行
出（イクス）サ行
咲（サク）カ行
浮（ウク）カ行
歸（カヘル）ラ行
入（イル）ラ行
重（カサル）ラ行
垂（タル）ラ行
聞（キク）カ行

開（ヒラク）カ行
漾（ソマル）ラ行
含（フクム）マ行
贈（オクル）ラ行
明（アカス）サ行
靜（シヅマル）マ行
舉（アグル）ラ行
隔（ヘダル）ラ行
鳴（ナル）ラ行
逢（アフ）ハ行

芽（メグム）マ行
移（ウツス）サ行
含（フクム）マ行
羨（ウラヤム）マ行
暮（クラス）サ行
悟（サトル）ラ行
捨（スタル）ラ行
清（キヨマル）ラ行
鳴（ナス）サ行
定（サダマル）ラ行

荒（アラス）サ行
後（オクレス）サ行
休（ヤスム）マ行
約（ツヅマル）ラ行
漏（モラス）サ行
顯（アラハス）サ行
崩（クヅル）サ行
霞（カスム）マ行
賴（タヨム）マ行
負（オフ）ハ行

治（ヲサル）ラ行
勇（イサム）マ行
匂（ニホフ）ハ行
惑（マドフ）ハ行
懸（カカル）ラ行
居（スワル）ラ行
薫（カヲル）ラ行
肥（コヤス）サ行
量（ハカル）ラ行
覺（サマス）サ行

調（トヽノフ）ハ行
靡（ナビカス）サ行
乘（ノル）ラ行
漏（モル）ラ行
拂（ハラフ）ハ行
傳（ツタハル）ラ行
咽（むせブ）ハ行
遣（ツカハス）サ行
滿（ミツ）タ行
亂（みだル）ラ行

副（そフ）ハ行
靡（ナビク）カ行
屬（タグフ）ハ行
濡（ヌラス）サ行
笑（エム）マ行
携（たヅサハル）ラ行
冷（ヒヤス）サ行
遣（ツカフ）ハ行
積（ツモル）ラ行
向（むかフ）ハ行

問ハ行　致サ行　放タ行　至ラ行
及ハ行　示サ行　説カ行　習ハ行
催サ行　偲ハ行　流サ行　止ラ行
行カ行　行ハ行　誘ハ行　弘ラ行
止マ行　飛ハ行　飛サ行　集ラ行
竝ハ行　叶ハ行　樂マ行　續カ行
卷カ行　舞ハ行　汲マ行　思ハ行下二段ハ行
貫カ行　急カ行　懲サ行　取ラ行
濕ハ行　暖ラ行　増サ行　騒カ行
曲ラ行　窮ラ行　歡ハ行　渡サ行

通ハ行　興サ行　足ラ行

中二段の活用字

中二段の活きとそキクケ
ルクレチツルツルレと第
二音第三音二段ホてオキンオキオクオ
クルオクルオチンオチオツルオツルオツ
ルおど活くを云ふなり　クルクレツルツ
ルのルルそ言をそへて活きをおせるホ
て其行の音ホを拘らばオキオクオチオ
ツと云ふ　外おしこの詞い皆少し

起カ行　戀ハ行　閉タ行　報ヤ行
下ラ行　老ヤ行　過カ行　落タ行
綻ハ行　舊ラ行　生カ行下二段カ行　生ハ行
延ハ行下二段ハ行　自然人為　忍ハ行　攀タ行
帶ハ行　垂ラ行下二段ラ行　荒ハ行　副ハ行下二段ハ行

屬（ハ行下二段ハ行）　耻（タ行）　充（タ行下二段タ行）　濡（タ行）

下二段の活用字

下二段の活きとそケククルクレセスルスルスとおど

第三音第四音と二段ふてウケンウケウ

クルウクルルウクレヤセンヤセヤスヤスル

ヤスレと活くを云ふあこのルレも上ホ云へるホれホ此詞いと多し

明（マ行）　得（ア行）　受（カ行）　任（サ行）

建（タ行）　連（ナ行）　替（ハ行）　求（マ行）

越（ヤ行）　馴（ラ行）　植（ワ行）　遂（カ行）

觸（ラ行）　染（マ行）　寄（サ行）　出（タ行）

生（ヤ行）　愛（タ行）　待（サ行）　響（マ行）

賞（マ行）　避（カ行）　見（ヤ行）　尋（ナ行）

與（ハ行）　浮（ハ行）　浮（カ行）　明（ア行）

暮（ラ行）　恐（ラ行）　辨（ハ行）　開（カ行）

令（カ行）　別（ラ行）　容（ラ行）　擧（カ行）

捨（タ行）　育（タ行）　重（ナ行）　隔（タ行）

清（マ行）　和（マ行）　垂（サ行）　降（ナ行）

聞（サ行）　聞（ヤ行）　逢（サ行）　定（マ行）

荒（ラ行）　治（マ行）　調（ハ行）　後（ラ行）

諫（マ行）　靡（カ行）　休（マ行）　匂（サ行）

載（サ行）　約（マ行）　紛（ラ行）　漏（ラ行）

濡（ラ行）　懸（カ行）　勸（マ行）　煤（カ行）

秀タ行　魅ナ行　居ワ行　傳ハ行
携ハ行　消ヤ行　燃ヤ行　薫ハ行
冷ヤ行　掠マ行　肥ヤ行　設カ行
憑マ行　仕ハ行　束ナ行　負サ行
覺マ行　覺ヤ行　乱ラ行　迎ハ行
答ハ行　投カ行　請タ行　離ラ行
教ハ行　告カ行　眺マ行　初マ行
濡タ行　深マ行　流ラ行　止マ行
弘マ行　群ラ行　集マ行　次タ行
立ハ行　叶ハ行　堪ハ行　絶ヤ行

續カ行　唱ハ行　揚カ行　枯ラ行
怠ラ行　隱ラ行　懲ラ行　賤サ行
捕ハ行　嘗マ行　衣サ行　煖マ行
加ハ行　戯ラ行　鎮マ行　曲カ行
窮マ行　顯ラ行　勤マ行　譬ハ行
寛マ行　貯ハ行　用ワ行

一段の活用字

一段の活きとそレンレル
レレンキンキルキルレルキルレルあど第
二音一段のミフて結くを云ふなるレル
レレキルキルのルレルを上ふいひたるご
くふたびれバこの詞いと少し
ふけ外
見マ行　干ハ行　似ナ行　着カ行

居ル ワ行　射ル ヤ行　鑄ル ヤ行　試ル マ行
簸ル ハ行　煮ル ナ行　顧ル マ行　噴ル ハ行
鑑ル マ行　衣ル カ行

變格の活用字變格を前の四種の活きと異て經緯行ふかゝいとならば活くあり セ シ ス ス レ ス レ コ キ ク ル ク レ
シ ナ ン シ ニ シ ス シ ヌ ル シ ヌ レ ぬ ど 活く
故か変格とかはくこの詞いと少し

來ル カ行　爲ル サ行　去ル ナ行　死ル ナ行
欲ル サ行　與ル サ行　往ル ナ行

四段の第四音より行ふ活くもの系り ヌテリカリの活用 図ふ細く云へり

アケラン　アケル　アケレ
ウテラン　ウテリ　ウテル　ウテレ

四段の第一音より行ふ活くもの系り

アカサン　アカシ　アカス　アカセ
オサン　オサシ　オサス　オサセ

變格を除き四種のうち中二段下二段一段第一音
セ文字をそへ四段第一音を其まゝ下二段のサ
行ふ活くもの系り

アカセ　アカス　アカス　アカスレ
オキサセ　オキサス　オキサス・スル　オキサスレ
エサセ　エサス　エサスル　エサスレ
キサセ　キサス　キサスル　キサスレ

變格を除き四種のうち中二段下二段一段第一音
ラ文字をそへ四段第一音を其まゝ下二段のラ

行ふ活くものあり

アカル　オキラル　エラル　ニラル

アカル　オキラル　エラル　ニラル

アカル　オキラル　エラル　ニラル

アカル　オキラル　エラル　ニラル

受辞結辞（ウケルテニヲハ　ムスビコトバ）をたやすくさとり得べきものおらねど其ありさまを説き示に先づ受辞を學ぶむ左ふあけたる圖ふよりてズ　デ　ジ　ヌ　ン　マシと緯連のまゝ暗記をそ絶えず八衢の圖ふ拡きて飽

アカズ　アカデ　アカジ　アカヌ　アカン　アカマシ

と活らかゝ覺ゆべ

緯ズ	ズ デ ジ ヌ ン マシ バ			
緯テ	テ ケリ ケン ツル シ タリ キ ナバ ヌル カ ネ	ツ、		
緯メ	メリ ラン ベキ ラシ トト トモ ナリ			
緯ニ	カナ マデ ニ ヲ ヨリ ガニ			
緯ド	バ ド ドモ			

四段の活き第一音をズ緯第二音をテ緯第三音をメリカナ二緯ふてうけ第四音を五種ともバ緯ふて受くるもの多し

一段の活き第一音をズテ二緯ふて受け第二音をメリカナの二緯ふて受くるなり四段は第三音と

一段の第二音とを同緯ホて受け断續をとかはも
れかヱ下ホ云ふを見る樂〜
中二段下二段第一音をズテの二緯ホて受け第二
音をメリ緯第三音をカナ緯ホて受くるなり
ハモ徒れ結辭を固より截斷言ホてノゾヤ何れ結
辭を續體言かヱ四段の第三音と一段の第二音と
を断續を兼ぬる故ホ受辭をメリカナ二緯ホて受
けてメリ緯を截断言と〜カナ緯を續體言とに中
二段を第二音メリ緯のみホ受けて截断言かヱ故
ホメリ緯を總て截断の受辭と知るべ〜第三音を

カナ緯れとホ受けて續體言なり
變格セシスルスレの五音を第一音ズテ二緯の
ウちレレカの二ッを受け第二音をテ緯を受けてレ
シカの二ッを除く第三音をメリ緯第四音をカナ緯
第五音をバ緯ホて受くるなヱコキククルクレを
第一音ズ緯とレレカの二ッを受け第二音テ緯第三
音メリ緯第四音カナ緯第五音バ緯ホて受けて第
一音第二音二處ホレシカをうけて前のサ行の格
とを異かヱナニヌヌルヌレネを第一音ズ緯第二
音テ緯第三音メリ緯第四音カナ緯第五六音をバ

緯ふて受くるなり

禁止れナ文字の活法（否不副詞の中ふて使令勸止の詞なり）

四段の第二音一段中二段下二段變格カ行第一音の首ふナ文字をはくれバ勿れと禁止の詞となる

なり　勿行（ナカレ）　勿戀（ナカレ）　勿来（ナカレ）　れごとし（四段第一音ふ丸文字をそふるあヱアカナ飽オサナ押こを皆希ひ求むるの詞あり勿れのナと混せべからず）

四段中二段下二段第三音一段第二音ふナ文字をそふれバ悉く禁止詞となるあヱ　アクナ　オスナ　オクルナ　オツルナ　ウルナ　ウクルナ　キルナ　ニルナ　等のごとし

三種れナン

三種のナンとを願のナン　他（タ）徒（ゾ）のナン　自ゾと云ふナンなり四段の第一音カ　サ　タ　ハ　マ　ラ　より受くるを願四段第二音一段中二段二種の第一音イ　キ　シ　チ　ニ　の緯連より受くるを徒のナンあヱ下二段第一音エ　ケ　セ　テ　ネ　の緯連よヱ受くるを願ふも徒ふもふヱてたゞ上のはぐけさまふよはなりゾと云ふナンをゾとれしていひ定ゑがさくふだらかふのぞゑて云ふ辞（カナ）なりまゐゾとおれしたとふいひしもあり下ふ一二例（タメ）證をあく（脚結抄ハ願のナンを訛（ナマ）のナンといひ

て里言のテクレヨと譯せと徒のナンをナランの約ふてソレナランとおしをかをて云ひしこと多
〜又ゾと云ふナンを里言のソレハナコレハナソ
レハナモコレハナモソレハナモシコレハナモ
おどへふナふホホカ〜

願他四段第一音ア緯

五月まつ山は〜ときにうちをふ夫今もなカ
ナンこそけふるたゑ古今集
ちぬる命はきもやをると心ゝみ玉の緒ぞか
をあをむといハナン同
ちは花を道見えぬまでうつマナンをかは〜
人もたちやをまると拾遺集

むををみ〜人もや来ると櫻花をふをまち見
てちらばちラナン古今集

徒自四段第二音一段中二段第一音イ緯

をたほゝとられふ〜床をはまさらまをらい
バ袖や沫とうキナン後撰集
きのふより〜ふをはされる紅葉の明日の色
をバみぞやゝミナン拾遺集
堀江こくたれゝ〜小舟漕かへをれなゞ人ホ
やこきをたりナン古今集

願未来徒下二段第一音エ緯

明たをゆけと行過かさ紀秋山を以かでゝ君
ゝ玉をゝ大工ナン　萬葉集

荒浪よ粉くる玉を枕よ置きこれこゝかを
とたれゝ涙ゲナン　同

女郎花おほかる野邊ゆやとをせゞ所やかく
あだれ名をやたテナン　古今集

春こゝ赤かるゝ川を花と見てをられぬ水
ゆ袖やぬレナン　同

我ゝいゝ神代のこゝもゝたゝへナンむかしを
志紀る住吉の松　拾遺集

ゾと云ふナン

柿本の人丸ナン歌のゑゞをれりけを　古今集序

大紀よりさきれ歌をあはゑて萬葉集とナン

名ゑけられたをける　同

ゝをしゝとせゆ所まり世を十はゑよナン

ゝ有ゝ所　同

ゾとれ紀ゞナン

名をバさ所ゑのみやはことナンゾ以ひゝる　竹取物語

二種の不

二種の禾とを令辞と不の轉用辞と為り四段第二音第四音より受くる禾を共ゐ令をる詞とおほれなど第一音より禾と受くるをコソのむをひゐて令ゐ仿ふれ不れ轉用と心得便し下ゐ一二例をあぐ

令　四段第二音キ緯

君ら代を契るれ郡ゐあえて来禾さたえおき世のうたかひもおく後撰集

仿ふことを月日ゐそへて待ッときをくゐ行末ゐかり禾とぞおもふ拾遺集

同　四段第四音ケ緯

海の中ゐもすそうせ禾とおんれきてをへ

伊源氏明石

春風を花の素きまゐ吹キをテ禾さたなバ思ひかくて見るへく拾遺集

思をむと頼えしこともあるものをなき名をたてゝあゞゐをとをレ禾後撰集

不の轉用　四段第一音カ緯

たも〳〵ども人めはゝみの高くれバ川と見ゐからえこそとたテ禾古今集

我袖を汐干ゝ見えぬ沖ゝ石の人こそ恋ゝ
かゞくまも恋ゝ　千載集

クシキクシキの活法

クシキの活き詞を人々おほく誤るものゝかゞ一端をあけゝもゝ　ゝし　ゝゝ山鳥の尾のしたりをのナガ〳〵シ夜をひとゝかもねん　とゝるゝまたく誤りのはゝらきゝふてナガシゝを七緯の截断言下圖を見るゝ　ナガ〳〵シゝを八緯の截断言ゝてゝはれゝも夜とゝ知ゝかゞ詞ゝ或人ゝ萬葉集本歌ゝ長永夜乎とあゞてゝなじさまの歌

ゝゝもへどもおもひもかれつあしゝゝきの山鳥の尾のナガキ此夜をとゝられバこの長永の永ゝ此字の誤りゝてナガキコノ夜をゝゝかもねんとよまんゝゝと以へり又字のまゝまんとゝゝを刊ナガキナガ夜をとよまゞバはゝくべきゝゝれゝゝまれ古へゝ正しき訓かあゞしゝを後人ゝ誤り讀傳へしゝとあゝれむべきこと也ゝ其證ゝ　いまよゞゝ秋かせさむくふゝ哉ゝゝむをいかゞでゝゝ哉ゝゝゝナガキ夜をねん萬葉集　さゞ人のあなゝゝゝゝれとゝゝもふらむ秋のナガ夜を以ゝゝを一ゝ以ゝゝ同ゝゝどありてナガキ夜ナガ〳〵シキ夜七緯八緯續體言　ナガ〳〵シ夜とゝいゝれぬこと恋りさるを古人とゝいへどかく誤りの恋ゝ屋あるもの恋れバよゝ

心を定めて學ぶ業きあり猶くさ〳〵下の圖お
ほき合せ見て知るべし

緯符			一轉 將然言	二轉 連用言	三轉 截斷言	四轉 續體言	五轉 既然言	希求言
一	中二段	起	カ経 キ		ク	クル	クレ	キヨ
二	下二段	受	カ経 ケ		ク	クル	クレ	ケヨ
三	四段	飽	カ経 カ	キ	ク		ケ	
四	四段	押	サ経 サ	シ	ス		セ	
五	変格	来	カ経 コ	キ	ク	クル	クレ	コ
六	変格	爲	サ経 セ	シ	ス	スル	スレ	セヨ
七	現在	善	ヨク ク		シ	キ	ケレ	カ納ア
八	現在	樂	タノシク シク		シ	シキ	シケレ	カ同上
九	過去	見ケン	ケ		キ	シ	シカ	
十	將	見マク		マク	マシ		マシカ	
十一	推察				スラレ ラシ			
十二	不可	スマジク	マジク		マジ	マジキ	マジケレ	カ
二符を以て合せ見るべし	受辭		ズヌバ デシ ジマ	ケクテ メリ ツヽ ナバ ヤ ル シヌカ	ラレ メリ キン ト ベラ モ シ	カナ ラ マテ ヨリ ニ	バ ド ドモ	

三所のシ文字は活

三ところのシとを七緯八緯九緯三所ホシ文字あ
ら故ホ云へり七緯八緯を將然言を除くの外を皆
現在の辭あり九緯を定て過去の辭七緯八緯を
文字の活き九緯を受辭ホ故ホ文字の活きの下
ホ付く又現在をシホて爽活てキホてはゞき過去
をキホてきせてシホてはゞく自然の妙用おを下
ホ〻さゝか其活用字をあけつ合せ見てよく〳〵味
ふ業

樂たし　八緯　截斷言　長なかし　七緯　截斷言

見み　九緯　續體言　惜を　八緯　截斷言
吉よ　七緯　截斷言　戀こひ　八緯　截斷言　九緯　續體言
無な　七緯　截斷言　綻ほころび　九緯　續體言
悲かな　八緯　截斷言　遠ゞほ　七緯　截斷言
来こ　キシ　キシ　コシ　コシカ　九緯　續體言　長永なが　八緯　截斷言
短たか　七緯　截斷言　知ち　九緯　續體言
疾ゞ　七緯　截斷言　遲かそ　七緯　截斷言
同おれ　八緯　截斷言　咲ひき　九緯　續體言
近ちか　七緯　截斷言　新あたら　八緯　截斷言
早ちや　七緯　截斷言　珍えはら　八緯　截斷言

厚あつ　七緯　截斷言　聞きゝ　九緯　續體言
愧はぢか　八緯　截斷言　優やさ　七緯　截斷言

七所のシ文字は活

四緯六緯七緯八緯々文字の活きあり　九緯十緯十一緯々受辭ホ𪜈故ホ文字の活きの下ホ付く文字の活きは下ホ只シ と一字ゐる々九緯の續體言ホて過去のシ ホり文字の活きの下ホマシ とある々十緯の截斷言と續體言とを兼た𪜈文字の活の下ホラシ とある々十一緯ホて截斷續體既然と三言を兼た法あり

思（おもひ）　九緯　續體言　申（まを）　四緯　連用言
清（きよ）　七緯　截斷言　成（な）　四緯　連用言
欲（ほ）　六緯　連用言　凉（を）　八緯　截斷言
澄（そまは）　十緯　截斷言續體言　古（ふる）　七緯四緯　截斷言連用言
舊（ふ）　九緯　續體言　狹（せま）　七緯　截斷言
廣（ひろ）　七緯　截斷言　盡（はく）　四緯　連用言
在（かた）　六緯　連用言　爲（せ）　十緯　截斷言續體言
爲（せ）　九緯　續體言　興（おこ）　四緯　連用言
起（おき）　九緯　續體言　越（こ）　四緯　連用言
降（ふるら）　十一緯　截斷言續體言既然言　嚴（きひ）　八緯　截斷言

重（おも）　七緯　截斷言　輕（かろ）　七緯　截斷言
催（もよほ）　四緯　連用言　深（ふか）　七緯　截斷言
深（ふけ）　九緯　續體言　淺（あさ）　七緯　截斷言
來（くら）　十一緯　截斷言續體言既然言　闇（くら）　七緯　截斷言
居（ゐま）　十緯　截斷言續體言　甘（あま）　七緯　截斷言

八所の〇文字は活

一緯二緯三緯五緯七緯八緯を文字の活き多り十緯十二緯を受辭なり故に文字の活きの下に付く七緯八緯十二緯を將然言と連用言とを兼たり一緯二緯五緯を截斷言のみ多り三緯を截斷言と續

體言とを兼たる十緯を連用言乃みあり

言 いはまく　十緯　連用言　来 くまでく　十二緯　將然言 連用言

睦 むつまじく　八緯　將然言 連用言　樂 たのしく　八緯　將然言 連用言

遂 とぐ　二緯　截斷言　置 おく　三緯　截斷言 續體言

起 おこく　一緯　截斷言　普 あまねく　七緯　將然言 連用言

招 まねく　三緯　截斷言 續體言　来 くく　五緯　截斷言

盡 はく　一緯　截斷言　見 みおく　十緯　連用言

融 とく　二緯　截斷言　淺 あさく　七緯　將然言 連用言

深 ふかく　七緯　將然言 連用言　美 うるはしく　八緯　將然言 連用言

爲 をまく　十二緯　將然言 連用言　授 ちぼく　二緯　截斷言

過 をく　一緯　截斷言　卷 まく　三緯　截斷言 續體言

懸 かけまく　十緯　連用言　懸 かく　二緯　截斷言

欠 かく　二緯 截斷言　三緯 截斷言 續體言

高 たかく　七緯　將然言 連用言

マシマジれ活

爲 せまし　十緯　截斷言 續體言　爲 をまど　十二緯　截斷言

来 こまし　十緯　截斷言 續體言　来 くまど　十二緯　截斷言

行 ゆかまし　十緯　截斷言 續體言　行 ゆくまし　十二緯　截斷言

ヌテリカリれ活法

ヌテリカリの活用を受辭と文字の活きとの別あ
ヒて譬へバミヌと云ふ詞ふても九緯の活きかれ
バ截斷言ふて既ふ見ーこと多り十一緯の活きれ
ヒバ續體言ふて見ざることあを又ツラヌと云ふ
詞ふても十一緯續體言ふ迄バ不鈎(ツラヌ)の意ふて受辭
あり二緯截斷言なヒバ連(ツラス)の意ふて文字の活きか
ヒかく誤りやを多を多ら紀故下ふ圖れよび活用
字を示に合せ見て知る樂ーー

辭符		將然言	連用言	截斷言	續體言	既然言	希求言
一	中段下二段	舊ラ經	リ	ル	ル、ツル	ルレ	リヨ
二		捨ダ經	テ	ツ	ヌル	ツレ	テヨ
三		蕪ナ經	ネ	ヌ	ヌル	ヌレ	ネヨ
三	四段	打タ	チ	ツ		テ	
三		鈎ラ	リ	ル		レ	
四	變格	去ナ	ニ	ヌ	ヌル	ヌレ	ネ
五	現在	ヨク	ク	シ	キ	ケレ	カ(約)
六	有居	アラ	リ	リ	ル	レ	
七	四段第四音ヲ受ケル終止ガ	ケラ	ケリ	飽	ケル	ケレ	
		セラ	セリ	押	セル	セレ	
		テラ	テリ	打	テル	テレ	
		ヘラ	ヘリ	逢	ヘル	ヘレ	
		メラ	メリ	住	メル	メレ	
		レラ	レリ	鈎	レル	レ、	
八	受ガナ	見テ	テ	ツ	ツル	ツレ	テヨ
九	受ガナ	受ナ	ニ	ヌ	ヌル	ヌレ	ネ
十	受ガナ	セラ	セリ	地(セリ)	セル	セレ	
		ナラ	ナリ	所(ナリ)	ナル	ナレ	
		タラ	タリ	出(タリ)	タル	タレ	
		ケラ	ケリ	咲(ケリ)	ケル	ケレ	
		メラ	メリ	流(メリ)	メル	メレ	
十一	不	ジ		セジ			ザ(約)
		ズ		セズ	ヌ	ネ	
		デ		セデ			
十二	將言	ン		ラシ		メ	
十三	送歎	ツ		メリツ			
十四	息願	ナ		アルカナ			
十五	願	ナ		アラナ			
十六	強願	ン		ミン(ムカシ)			
十七	願	カナ		モカナ			

	一轉	二轉	三轉	四轉	五轉
この符を以て合せ見るべし	ズ デ ジ ヌ ン マシ バ	テ ケリ キ ツ、 ケン ナバ ツル ヌル レカ シ	メリ ラン ト モ ベキ ラシ	カナ ヲ マ ニ ヨリ	バ ド モ

四所のヌ文字は活

九緯十一緯を受辞あり故ふ文字の活きの下ふ付く二緯四緯を文字の活きふ至九緯を畢はヌあり

十一緯を不のヌ‖あり

咲ちきぬ　九緯　截断言　不咲ちかぬ　十一緯　續體言

下おりぬ　九緯　截断言　不下おりぬ　十一緯　續體言

来きぬ　九緯　截断言　不来こぬ　十一緯　續體言

知をぬ　九緯　截断言　不知をらぬ　十一緯　續體言

釣はをぬ　九緯　截断言　不釣はらぬ　十一緯　續體言

連はらぬ　二緯　截断言　去へぬ　四緯　截断言

見みぬ　九緯　截断言　不見みぬ　十一緯　續體言

尋たばぬ　二緯　截断言　束はかぬ　二緯　截断言

三所のテ文字は活

八緯を受ウケかなる至故ふ文字の活きの下ふ付く二緯三緯を文字の活きあり二緯と八緯とを将然連用の二言を兼た至三緯を既然希求の二言を兼た至

知をて　八緯　将然言連用言　待まて　三緯　既然言希求言

捨てて　二緯　将然言連用言　居ゐて　八緯　将然言連用言

立たて　三緯　既然言希求言　二緯　将然言連用言

建たて　二緯　将然言 連用言
撫なで　二緯　将然言 連用言
咲さきて　八緯　将然言 連用言
勝かて　三緯　既然言 希求言
果はて　二緯　将然言 連用言

五所のり文字は活

六緯を有居の二字の活きおを十緯を受辞おを故
か二字ともゐ文字の活きの下に付く七緯を半か
な多り故か二字のうち上の一字を文字の活きお
を屋て四段の活きより移りたる詞ふて四段の

押れて　八緯　将然言 連用言
打うて　三緯　既然言 希求言
出いで　二緯　将然言 連用言
建たて　八緯　将然言 連用言
出いで　十緯　将然言 連用言

活きの外をこの七緯へ續かぬ格おを一緯三緯を
文字の活き多り六緯と七緯と十緯とを連用截断
の二言を兼たを一緯を将然と連用とを兼たり三
緯を連用のみ多を

降ふり　三緯　連用言
降ふりけり　十緯　連用言 截断言
舊ふりな　十緯　連用言 截断言
照てれり　七緯　連用言 截断言
折をり　三緯　連用言
下れりな　十緯　連用言 截断言

降ふれり　七緯　連用言 截断言
舊ふり　一緯　将然言 連用言
照てり　三緯　連用言
居をり　六緯　連用言 截断言
下たり　一緯　将然言 連用言
織をり　三緯　連用言

織をれり　七緯　連用言截斷言
足たれり　七緯　連用言截斷言
勝まさり　三緯　連用言
有あり　六緯　連用言截斷言
咲さけり　七緯　連用言截斷言
凝こり　三緯　將然言連用言
爲をり　十緯　連用言截斷言
澄をえり　十緯　連用言截斷言
氷こほれり　七緯　連用言截斷言
多有おほかり　五緯の連用言と六緯の約　五緯の連用言と六緯の截斷言との約語

足たり　三緯　連用言
過をぎたり　十緯　連用言截斷言
勝まされり　七緯　連用言截斷言
咲さけり　十緯　連用言截斷言
懲こり　一緯　將然言連用言
成おり　三緯　將然言連用言
澄をえり　七緯　連用言截斷言
氷こほり　三緯　連用言
氷こほりけり　十緯　連用言截斷言

雜

こゝを九緯以下の活用乃みよて詞の誤りやをきを侍じゝ出せる

散ちりなん　九緯　將然言
散ちらなん　十五緯　截斷言
咲さきなん　九緯　將然言
咲ちきはゝ　十三緯　連用言截斷言
匂にほひなん　九緯　將然言
匂にほもなん　十五緯　截斷言
行ゆけかゝ　十六緯　截斷言

十二緯　截斷言續體言
咲さかなん　十五緯　截斷言
十二緯　截斷言續體言
咲さけかゝ　十六緯　截斷言
十二緯　截斷言續體言
行ゆきはゝ　十三緯　連用言截斷言
在ありはゝ　十三緯　連用言截斷言

在（おはせらん　かい）　十六緯　截斷言　無（なきかな）　十四緯　截斷言

無（あくもがれ）　十七緯　截斷言　見（みるかな）　十四緯　截斷言

見（みてしがれ）　十七緯　截斷言　長（おかきかれ）　十四緯　截斷言

長（なかくもがれ）　十七緯　截斷言

上中下一段の活法

上中下一段の活きとゝ前の八欄五種活用の外ゐて一段の活きより轉しきたる素至今別ゐ上一段中一段下一段三種とゐして略圖を巧ぎたりこゝ源圖雄大人の考へゐ志るさ注たるよよれ至これ活きゝ上一段と下一段と受辞もひとしく第四音の體言ゐゐる為めセル‖セル‖セレの詞ゝ第四の音よ至ル‖と受くる四段の活きの例ゐ法ゐ四段ゐあらばしてセル‖セル‖と活くゝ一段の活きと知る癸しこれのみならばこの一段ゐ活く詞ゐはして下ゐ一二例活用の證をあく合せ見る為して上一段ゝ五種活用圖中ゐあれバいもば

上一段活

着	似	干	見	射	居
キ	ニ	ヒ	ミ	エ	ヰ
ズ	デ	ジ	ヌ	ン	マシ
テ	ケリ	ケン	ツル	レタリ	
ツ、	キ	ナバ	ヌル	シカ	

キル	ニル	ヒル	ミル	エル	ヰル
メリ	ラン	ベキ	ラシ	トモ	
カナ	マテ	ニ	ヲ	ヨリ	

キレ	ニレ	ヒレ	ミレ	エレ	ヰレ
バ	ド	ドモ	バヤ		

中一段活	下一段活
来爲寢經得	蹙爲宿經得
ク ス ヌ フ ウ	ケ セ ネ ヘ エ
メリ ラン ベキ ラン	ズデ ジア マン シ
ト モ	テリ ケツ ルン タシ リ
	キツ ナバ ヌル シカ
クル スル ヌル フル ウル	ケル セル ○ ヘル ○
カナ マテ ニヲ ヨリ	メリ ラン ベキ ラン トシ トモ
	カナ マテ ニヲ ヨリ
クレ スレ ヌレ フレ ウレ	ケレ セレ ○ ヘレ ○
バド モド バヤ	バド モド バヤ

中一段の活

ク　ヒ夷へのかたよ雲居たち来も　古事記　ヒかせ

こゞ来へきよ比高り　日本紀　うらーはゝら来

萬葉集

クル　みちクルあはの　萬葉集　あらークル天の日は

きの　同集

クレ　たゞこえクレば　萬葉集　朝ぢたち来ーてこぎ

レバ　同集

ス　あれみにくさかーらをス　と　萬葉集　宇らこひ

ス　ス来ヲ　同集

スル　きそひかりスル月を来みけヲ　萬葉集　はヲス

ル　妹孫を　同集　れをひぞヲがスル　同集

スレ　のはりたち國見をスレぞ　萬葉集　門出をスレ

ぞ　同集

ヌ　なひきゝヌちむヒをまちがてよ　萬葉集　おく

とゝれけきヌとゝ忍ん　古今集ふたヱヌぞ
かゝ見てたりや君　拾遺集

ヌル　紐ときさけてメルかへゐ　萬葉集秋の夜の長
きゐゑゝやりヌルがくるゝさ　同集

ヌレ　れもひてヌレゝ夢ゐゑけヱ　萬葉集おもひ
はゝヌレもや人の見えはらん　古今集おとこ
ゝ右をゝたかてヌレゝ　雅俗集

フ　みなそこフ　日本紀海もらを遠くヱたりて年
フ　とも　萬葉集

フル　我身ゐゐフルおかゑせゝまゐ　古今集うきを
も志らて年をゝミフル　後撰集

フレ　ゝゝしら来フレば　古事記こゝの國べゐ年フレ
ば　萬葉集

ウ　古書ホウ得と云ひゝことゝはほく見えば萬葉
集ゐどゐゝゑ得とのみゝへり故ゐ証歌見あ
たらぢされとウウルウレと活く語理より考
ふれば一段の活きたるや所爲ちゝ有り

ウル　これも前と同く証歌ゝ見あたらざれど物語
文ゐ罪ウルヱさぞかど云ふことおはゝ

ウレ　春日野のとふ火の野守見ゝ物をなき名とい

はゞ罪もこそウレ　後撰集

下一段の活

ケ　この蹴を古へクエ（クエの約ケ）とのみいひて神代紀ふ蹴散をクエハラヽカスと訓註せ玉和名鈔ふ蹴鞠を末利古由（マリコユ）と仮玉て大れコユも後ふて正しくをクエと仮る種きあり垂仁紀ふ當麻蹴速（マクエハヤ）と云ふ人あ玉今昔物語仁壽殿れ臺代の御燈の條ふ辨足をあげてはたとケ蹴た玉けれバ云々など見えたり

ケル　こゝ記もいまゝ証歌見あたらぎれと前ふいふ

ふれゞ

ケレ　鞠子川ケレばそ波をあかりける　東鑑

セ　八十れくまぢふ手向セバ　萬葉集　初ゞかりだふセでやゝかれむ　同集

セル　旅ふこやセル大れ旅人仮れれ　萬葉集　以かふセルぬせの海ぞも　同集　さき山のへふやゞりセルらむ　同集

セレ　穴かべなかセレ　萬葉集　ゞかた丶セレバ　古事記

へ　あをぬ妹かも年をへふゝ　萬葉集　かくてもへぬる世ふこそ仮りれ　古今集　花ふも葉ふ

も糸をみなへし　同集　おほたたゆへつはほと
京王後撰集　瀧のいとをへて見まゝしき　拾遺
集

ヘル　これも証歌を見たらざれど和名鈔ふ綜和
名閉織縷持レ絲交者也とあるて今も機をヘル
とをはへどフルとをはをぬゝりされば下二
段ふへフと活くとを異ふてたゝを一段の活
きかること所ゝらかゝり

ヘレ　前ふかなし

エ　已はをもや安見子エたる萬葉集るれふエし

えし　山ほをぞこれ　同集

エル　こをも前ふはへはれみ同く體言より受くる詞
ふて下二段のエウとうくる活きとを異かる

エレ　前ふれなし

第四綴文學を前ふはへる詞を重疊結合して文章
をなをものふて其體格千様萬態一々説く暇から
ぬ只昔とをる世ところを斷續顧應相和して文義冗
復せさはを要をまづ名詞を以て其事物をあらを
し猶所ゝらかゝらざる世きを形容詞を以てこれ

を摸し事物を重復せむとする少きを代名詞を以てこれを指示し動詞をその文章の變化に隨て限りなく活動を猶精細に位置狀態を說き示さむとするにを副詞を以てし詞を記むとするときを接續詞を以てこれを續き喜怒を發せんとするときを感詞を以てこれをあらはし然して後によく一編をなしたものあり我國凡百の事物をこの七種詞の外に漏るゝことなし故に詞法にはきちかに記バ文章をかのほかにあるものあり余をこれを贅せばなは此學を究めむとする者を大小文典を始め古人の書籍にはきて其體裁を悟得をべし

漢字と假名とを以て文章を綴るにを字訓と語尾變との用法を心得べし一二例をあけいはゞ尤即ちどを語尾の變せざる文字にて皆字訓あるに去れを知らぬ人をれはくモチの假名をそへてかけるさらぞモツトモ〻スナハチ〻と讀むべきあり又知可にどをシランシリシルシレシリシレル〻八衢四段べクべレべキべケレべカレべカランクシキの活七變と皆語尾の變をる文字にて知ルベシとル字をそへてかくに例あるにたゞ知ベシとか可

カランとカ（クアの約ふてクアランあり）べ字をそへてかく屈きをたゞ可ランとのみかき又同（オモクシキの活八緯）鑑（カガミ八衢一段）おどそシミよそ活く詞ふるふ同シク鑑ミルと字をそへてかくおどの誤そ常ゐれほ（日本そもと詞の國ふるれを記そるゞ故ふかお漢字をかりて交互く知き誤そを生だるあり）かくのかくはそゞふかく考へざる人々そ知そシの一語可そべの一語とせしもの此如くおもひて怪むべけれどこきさみはらゞ語尾の變そる文字故その變を知らせむた免そふるものあり總て語尾の變そる文字そ假名をそへて書くを例とそ熒しく然れども中古の語學者ふれほく體言そ字をそへゞ餘の活きそ皆字をそへて書くを例とせしこそありこ記まゞ一格ふそ心得べし夫我國の人そ慣習の久しき故たゞそへ假名をそへぞとも受辭ふりて讀ミそかは屈け記ど語學文法の正しく定律ある他邦人をして讀ましむるときそ或そそへ或そそへぞ人々の心ゝおかきたる文章ふてそなかく讀み得べきものふあゞ余ほゝ今體文の書籍を見るゐ十ふ七八そ皆文字用法ふ定律おきものゝ如くあり字そもと事物を記そるの符あり符規律おきゞきそ合そ屈かゝゞ

20142

宇も定律おき少き々千古ふ傳へがたし後世必讀むべからざはの文章を生ぜべきあり實ふ我國の一大闕事おらぞや學者それ心せよ

餘言

余ゝ唯詞學校の護門丁のみ今こゝふ扉を開きて生徒諸君を八衢の大道ふ誘導るかゞ内殿樓閣れ美ゝ諸君各自ふ昇觀し給へ我國固よりかく嚴然たる學校あゞとゝ云へども世こゝの門ふ入る者ゝくふく余ゞごとき眼連覺のみを見るものふだも及ぞざる人おは〳〵何ぞ外人ふ向て内殿樓閣の美を語らんや實ふ恥つへきあり請ふ今よりこの門ふ入ふ者れふく此書の如き扉をして開閉繁多ふはゞたゑふ破壞せし〳〵ゑんことを天下の生徒諸君ふ謀るゝ護門丁れ至願あり

日本詞學入門卷之下終

395-25

明治十年九月廿五日版權免許
同　十一年一月　出版　定價三十五錢

編者　新潟縣平民　旗野十一郎
第廿二大區小壹區
越後國保田街第九百八拾一番地

出版人　同縣平民　漆山大愚
同
同第九百六拾三番地

賣弘書肆

新潟縣下
越後高田　藤屋直三郎
同長岡　上田屋次平
同　鳥屋十郎
同　松田周平
同　中村作平
同三條　樋口屋小左工門
同新潟　堀次作
同　吉川成藏

375
25
2止

賣弘書肆

越後葛塚　弦卷七十郎
同沼垂　本屋善作
同柏嵜　高桑屋小兵衛

東京發兌人

芝三嶋町　山中市兵衛
銀座四丁目　山中北郎
新大坂町　小林喜右工門

新潟縣下

越後水原　西村六平